

平成二十六年 度 中学校入学試験問題 国語

※ 字数制限がある問題は、「、」「や」「。」も一字と数えます。

次の文章を読んで、あとの質問に答えなさい。

① 日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」^(注1)「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白^(注2)というが、これも空間的な間である。

② 日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁^(注3)というものがない。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵^(注4)のかかる扉^(注5)で密閉してしまう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

③ それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖^(注6)や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸^(注7)や蓐戸^(注8)、襖や几帳^(注9)などさまざまな間仕切りの建具で仕切られてはいるものの、いたるところすき間^(注10)だけである。西洋の重厚な石や煉瓦^(注11)や木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

④ しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼^(注12)を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っている、いざ、大勢の客を迎えて祝宴^(注13)を開くという段^(注14)になると、すべてをつないで大広間^(注15)にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在^(注16)につないだり切ったりして暮らしてきた。

⑤ 次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居^(注17)や音楽では声や音のしない沈黙^(注18)の時間のことを間という。

⑥ パツハにしてもモーツァルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽くされている。たとえば、モーツァルトの「交響曲二十五番」などを聞いていると、息を継ぐ暇^(注19)もなく、ときには息苦しい。モーツァルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬^(注20)たりとも音のない時間を許すまいとする衝動^(注21)に駆^(注22)られているかのように思える。

⑦ それにひきかえ、日本古来の音曲は琴^(注23)であれ笛^(注24)であれ、音の絶え間^(注25)というものがいたるところにあつて長閑^(注26)なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っているとやおら次の節がはじまるということも珍^(注27)しくない。そんなふうには、いくつもの絶え間にたち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

⑧ 空間的、時間的な間のほかにも、人やものごととのあいだにとる心理的な間^(注28)というものもある。誰でも自分以外のひとのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であつても長短さまざまな心理的な距離^(注29)、間をとって暮らしている。このよう^(注30)な心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑^(注31)に運ぶことができる。

⑨ こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方をあやまれば「間違^(注32)い」、間に締め^(注33)まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け^(注34)」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟^(注35)であつて、日本文化はまさに間の文化といえることができるだろう。

⑩ では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なもの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩^(注36)になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存でき

るはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなってパニックに陥ってしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起こらない。

Ⅱ 和とは異質のもの同士が調和し、共存することだった。この和が誕生するためにはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

(長谷川 權『和の思想』より)

〈注1〉間取り……家の中の部屋の並び方の関係。

〈注2〉蔀戸……昔の建物の日や風雨を防ぐ戸。

〈注3〉几帳……昔、部屋のしきりに使った布。

〈注4〉衝動……自分でもわからずに発作的に行動する心の動き。

〈注5〉円滑……ものごとが順調に進む様子。

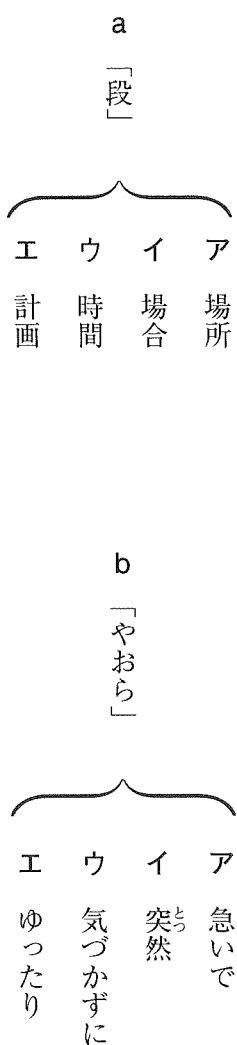
問一 ― 線①「日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある」とありますが、「間」という言葉の意味を説明しているのは、どの段落までですか。段落番号で答えなさい。

問二 ― 線②「余白」とありますが、「余白」は絵画においてどのような役割を果たしていると考えられますか。最も適切なものを次のア～オの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 見る人が、のびのびと自由に想像力を働かせて、ゆとりをもつて絵画の世界を鑑賞することができるようにする役割。
 イ 白い部分が他の色彩を引き立てて、一つ一つの色を目立たせることによって、絵画全体を優雅に美しく見せる役割。
 ウ 必要な部分以外は描かないことで、見せたい部分をはっきりさせて、画家の主張を鑑賞者に明確に伝える役割。
 エ 何も描かれていない部分が何を意味するのかを見る者にいろいろ考えさせることで、画家への興味を引き出す役割。
 オ 色彩で塗りつぶさず白く残した部分によって、日本独自の歴史と伝統を感じさせる華やかさと雄大さを表現する役割。

問三 ― 線③「これ」、―― 線⑤「それ」の指している内容を書きなさい。ただし⑤は五十字以内で書くこと。

問四 ― 線a「段」、―― 線b「やおら」の意味をア～エの中から選んで、記号で答えなさい。



問五 ― 線④「自由自在」とありますが、この四字熟語の構成に近いものを次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 百発百中 イ 独立独歩 ウ 半信半疑 エ 適材適所 オ 自画自賛 カ 不眠不休

問六 ― 線⑥「このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる」とありますが、それはなぜですか。文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

問七 空欄に当てはまる漢字一字を、本文から抜き出して書きなさい。

問八 この文章から読み取れる日本と西洋の違いについて、五十字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が五歳頃であつたろうか。ある夏の日、明るいうちに母と弟と三人で銭湯^Aに行つた。二丁半ほど離れたその銭湯の庭には、あやめの花がぞつくりと、見事に咲いていたことを覚えてゐる。母より先に風呂^{ふろ}から上がった私は、脱衣場で見知らぬ赤ん坊^{ぼう}を膝^{ひざ}に抱いた。その頃から私は赤ん坊が好きだつたのだらう。ところがその子は、抱かれるや否や、私の着物をウンチで汚^{よご}してしまつた。入浴する前か後かは知らないが、おしめが取られていたのだつた。

「よその赤ちゃんを抱いたりするから……」

私は母に叱^{しか}られた。私の母は賢い人だと思つてゐるが、この時の叱責^{しつ}は私には納得出来なかつた。よその子を抱くことが悪いとは、子供心にも思えなかつたのだ。だがそのことは別として、着物を汚してしまつたことは、悪かつたとも思つた。母は私の汚れた着物を持つて、

「すぐに迎えに来るから、ここで待つていなさい」

と、弟を連れて帰つて行つた。夏のことと、浴衣一枚^②しか着てゐなかつたから、その一枚を持つて帰られると、着る物がなかつた。裸で帰るわけにもいかず、私は家人の迎えを待つてゐた。だが、わが家からはなかなか迎えに来てはくれない。私は子供だつたから、待つてなかつたのかも知れない。短い時間が長く思われたのかも知れない。私は裸でいつまでもその場にゐるのが不安になつた。私はついに帰ることにした。帰るといつても着るものはない。真つ裸で帰るわけにはいかない。と、どうしたことか、母は私の着物だけを持つて、私の三尺帯を置いて行つたことに気づいた。私はその三尺帯を肩から斜めに体に巻きつけた。か細い子供の体である。幅広い三尺帯である。

I 膝^{ひざ}のあたりまで巻きつけることが出来た。あの時の、橙色^{だいだい}のちりめんの帯の感触は今も私は覚えてゐる。多分その姿は、珍妙であつたにちがいない。風呂屋にゐる人たちが笑つてゐるのを子供心に感じながら、私はまだ明るい夕方^①の街に出た。銭湯のすぐそばで、半裸の男が道路に水を撒いてゐた。男は驚いて、二メートルほどの長い柄^えの柄杓^{びしやく}を持つたまま、

II 私の姿をみつめた。私は広い道路の真ん中を、

III 歩いて帰つて行つた。恥ずかしい気がした。が、一方、裸ではないのだという気持ちがあつて、誇らしい思いもあつたような気がする。つまり、三尺帯を巻きつけるとは、われながらメイアン^Bと言いたいところだつたのだらう。

家まで、あと半丁という所まで来た時、風呂敷包^{ふろしき}を抱えて、私を迎えに来た姉に出会つた。姉は私の奇妙な姿を見て、

「まあ！」

と、実に何ともいえない優しい笑顔を見せた。そして、ふだんより何倍も優しい語調で私を慰め、太い柳の木の下で、ぐるぐる巻きの帯を取り、風呂敷の中の浴衣を着せてくれた。私はこの時ハジメテ姉の姉らしさに触れたのである。私がようやく、自分以外の人間を意識する年齢になつてゐたからであらうか。きょうだい愛をたつぷりと私は浴衣と共に着たのであつた。

その後、この姉らしさはたびたび感ずるようになった。それは必ずしも「優しさ」となつて現れるとは限らなかつた。これはその翌年くらいの頃のことであつたろうか。夏休みで、近郊に住む従姉妹たちが、私の家にしばらく来てゐた。彼女たちの住む家のそばには、滔々たる灌漑溝^{かんがいこう}があつて、従姉妹たちは水泳が巧みであつた。が、私の家に来ては、そう手近な所に水遊びをする場所はない。一キロほど離れた辺りに忠別川^{ちゅうべつ}が流れてゐた。そこにみんなで行つたわけだが、私には生まれてはじめての遠距離であつた。帰り道、私は水遊びと太陽の暑さで疲れてゐた。歩き方がおぼつかなかつたのだらう。姉と同じ齡^との従姉が、いきなり私に背を向けて屈み、

「さ、綾ちゃん、おんぶしてあげる」

④ と言つてくれた。やれうれしやと、私はためらわずに従姉の肩に手をかけた。途端に姉の百合子の声が飛んだ。

⑤ 「恵美ちゃん、おんぶしないで！ 癖になるから」

毅然とした声だつた。いつもの優しい姉の声ではなかつた。私はひどくきまりの悪い思いで、今かけた手を従姉の肩からはなした。

「そうかい」

従姉も立ち上がった。私は、

「おんぶしないで！ 癖になるから」

と言った言葉を、その時実によく納得がいつて受け入れた。私は疲れてはいたが、歩けば歩くことが出来た。疲れてはいたが、誰かに背負って欲しいと思うほどではなかった。だから私が従姉に背負われようとしたことは甘えであった。私は子供なりに、姉の言った「癖になる」という言葉をアヤマリなく受け取ったように思う。自分はもうだいぶ大きくなったのだ。いつまでも人におんぶしてもらってはならないのだ、という自覚がああの時与えられたような気がする。その後私は、誰かがおんぶしてあげようと言つても、「癖になるから」と、姉の言葉をそっくり使つて、コトワルようになった。私にとって、裸に三尺帯を巻きつけて歩いた時よりも、姉にこの言葉を言われた時のほうが恥ずかしかった。そして、優しい姉にもまして、この時のきびしい姉に、姉らしさを感じたのだった。

(三浦綾子『草のうた』より)

〔注1〕丁……距離の単位。一丁は約109m。

〔注2〕ちりめん……絹織物のひとつ。布面に細かくしわをたたせたもの。

〔注3〕柄杓……水などをくみ取る道具。

〔注4〕滔々たる……水が勢いよく流れる様。

〔注5〕灌漑溝……田畑に水を引くための用水路。

問一 ― 線①「抱かれるや否や」とありますが、この意味を八字以内で答えなさい。

問二 ― 線②「浴衣一枚」とありますが、次の図①②のものはどのように数えますか。

解答欄の空欄にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。()内はその数を表します。

例 浴衣(一) ……一枚

① お箸(一)

② 桜の花(三)



問三 文中の I III に入れるのに最もふさわしい言葉を次のア～オの中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア ゆうゆうと

イ ゆったりと

ウ しつくりと

エ まじまじと

オ ちらりと

問四 ― 線③「おぼつかなかった」・― 線④「ためらわずに」・― 線⑤「毅然とした」の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

③ 「おぼつかなかった」

ア いつもと違った

イ 元気がなかった

ウ 他の人より遅かった

エ しっかりしていなかった

④ 「ためらわずに」

ア 迷わずに

イ 疑わずに

ウ 何も考えずに

エ 悪いとは思わずに

⑤ 「毅然とした」

ア 態度が冷たくて、不親切な様子

イ 態度が大きくて、いばっている様子

ウ 態度が決まっていて、ゆるがない様子

エ 態度がきつくて、とがめるような様子

問五 ――線⑥「ひどくきまりの悪い思い」とありますが、これはどのような思いですか。六十字以内で説明しなさい。

問六 「私」にとって姉の百合子はどんな存在ですか。八十字以内で説明しなさい。

問七 この文章の説明として適当なものを次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 心理描写に比べると情景描写は簡潔に行われ、「私」の気持ちを説明することが中心になっている。

イ 巧みなたとえの表現や修飾語を多く用いることで、登場人物の気持ちをことば豊かに表現している。

ウ 道ばたの花や、町の通りなどの情景描写をしながら、その時々登場人物の心情までも感じさせる。

エ 五歳のころの出来事の中に、大人になった「私」の想像がはさま込まれ、現実と空想の間を行ったり来たりする独特な世界が創り出されている。

オ 五歳の「私」が整然と語る形をとることで、出来事が、まるでたった今読者の目の前で起きているかのように生き生きと描かれている。

カ 五歳の「私」の目で出来事を描きながら、今の「私」の思いもさしはさみ、同じ出来事を二つの視点で見られるように表現している。

問八 〽線A～Eの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。ただし、送り仮名があるものはそれも含めて答えなさい。

三

次の――線部分の敬語の使い方が正しければ○を書き、間違っていれば正しい敬語に直して書きなさい。

- ① 父が、先生によくとおっしゃいました。
- ② 今度は、私が先に参ります。
- ③ あなたも一度、その美しい写真を拝見してください。
- ④ どうぞ、ごゆっくり夕食をいただいでください。
- ⑤ お客様、お部屋までカギをお持ちしてください。

国語解答用紙

受験番号	
氏名	
得点	

❖ 字数指定がある問題は、「 」、「・」、「。」や記号なども一字とする。

一

問一

問二

問三

③

問三

⑤

50字

問四

a

b

問五

問六

50字

問七

問八

50字

二

問一

問二

①

一

②

三

問三

I

II

III

問四

③

④

⑤

問五

60字

問六

80字

問七

問八

A

B

C

D

E

三

①

②

③

④

⑤